

乳幼児サークルでは活動方針の一つとして平和学習会にとりくみ、子どもたちの未来を守るために何が大切か学んでいます。

昨年と今年は広島出身の大学生、高垣慶太

さんを講師としてお招きしました。高垣さんは、医師で原爆投下直後の救護に携わられた曾

祖父の被爆体験を、中学3年生の時スピーチ大会でお話しされたことがきっかけで平和についての活動を始められました。現在は広島のことだけでなく、戦争が今でも続いている現状をどうにかしなければと仲間とともに今までのことを精力的に行なつておられます。

また、今年は原爆小頭症の被爆者と家族の会「きのこ会」の、事務局長の平尾直政さんにも話をお聞きしました。平尾さんは、中国放送のドキュメンタリストとしてお仕事をされていました頃から事務局長として支援されてます。交流サイト（SNS）で情報発信はしていたが、会の目的や核兵器廃絶の訴えがすぐ見られない課題があり、記録を残し続け、小頭症の実態を多くの人に知つてもらいたいと、ホームページを開設されました。

被害と加害を伝える被爆建物

高垣さんは高校2年生の時、被爆建物として登録されている「旧広島陸軍被服支廠倉庫」に解体問題が浮上し、市民向けに行なわ

れ、昨年6月にオーストリア・ウィーンで開催された核兵器禁止条約の第一回締約国会議にはICRCユース代表として出席されました。会議出席を踏まえた最近の活動、想いについて、ご本人からメッセージを寄せていただきました。

昨年の核兵器禁止条約の第一回締約国会議では、曾祖父たちの広島・長崎での原爆救護活動の経験についてお話しする機会をいただき、被害者援助について会議中に提言を読み上げるなどの活動も行ないました。

現地での活動を通じて最も実感したとの一つは、「核兵器の被害は、世界中に散在している」とことです。よく「唯一の被爆国」や「唯一の戦争被爆国」という言葉を聞かせませんか？ また、最近のG7広島サミットで発出された「核軍縮に関するG7首脳広島ビジョン」にも「我々は、77年間に及ぶ核兵器の不使用の記録の重要性を強調する。」と書かれています。しかし実際は、広島・長崎での核兵器使用から、世界中で総数2050回を超える核実験（その大半が核爆発を伴う）が繰り返されてきました。77年間、たしかに戦争で核兵器は使用されませんでした。けれども実験は繰り返され、世界中に被ばく者が生まれたのです（こうした世界中の被ばく者を総称して「グローバルヒバクシャ」と



高垣さん。核兵器禁止条約の第1回締約国会議にて

仲間がいっぱい ひろしまの療育

この連載では、全障研広島県支部広島乳幼児サークルのメンバーが、乳幼児期の療育で大切にしてきたこと、保護者とともに運動してきたことなど、ひろしまの療育についてお伝えします。



第5回 子どもたちの未来を守るために —平和を考えるとりくみ

広島乳幼児サークル会長 石木恵子

れる見学会に新聞部として取材に行きました。そこで、原爆の被害の部分しか見えていなかったことを知ったと言います。日清戦争の際、広島は明治天皇が一時的に東京から移つたことで臨時の首都となり、その後の日露戦争からアジア・太平洋戦争まで、兵士たちが出兵する軍都でした。当時アジアで何があったのか、太平洋で何があったのかを忘却してはいけない、それを忘却することは、広島に原爆が落とされたことを忘却することと同じではないか。戦争の悲惨さを語る人がいなくなつても、建物から推測、考えることができる、肌で知ることができる、声なき証言者である被爆建物の保存について、知り、考える機会をつくりたいと取材・発信を重ねました。被服支廠は原子爆弾の悲惨さも伝えてくれるが、どれだけ軍が力をもつていたか、その規模感を感じさせる建物もあると、当時を知る被爆者の方は言う。戦争というものの複雑さを伝えてくれる建物で、原爆を落とされた時の顔と、戦争に突き進んでいた顔と、前後の意味をもつている建物だと高垣さんは話されました。

若い世代と被ばく者がつながる活動

大学進学後、高垣さんは赤十字国際委員会（ICRC）のユースとして活動しておら

ウイーンでの締約国会議には、その被害を受けた中部太平洋のマーシャル諸島、中央アフリカのカザフスタン、オセアニアのオーストラリアなど多様な地域から、核被害地にルートをもつ若い世代や当事者が参加していました。帰国後、「もっと世界の核被害について学ぶ場をつくりたい」と仲間とともに動き始め、昨年11月より「Youth Community for Global Hibakusha-世界のヒバクシャと出会うユースセッション」という若者対象のオンラインイベントを月一回のペースで開催しています。2023年6月現在までに、マーシャル諸島での核実験被害を研究する明星大学教授・竹峰誠一郎さん、フィジーで反核運動にとりくむMere Tuilauさん、ニュージーランドのDan Harvard Jonesさん、高知でビキニ被ばく船員訴訟の取材をされている笛島康仁さんをオンラインでお招きし、お話を伺つてきました。また、4月、5月には東日本大震災に伴う福島第一原子力発電所事故で被災し、伝承活動をされている木村紀夫さん、マーシャル諸島共和国政府・核問題委員会のEvelyn Ralphsonさんをスピーカーにお招きし、対面で実施しました。こうした日本の若い世代と世界の核被害地、活動する人々をつなげるとともに、8月